

揺りかごの中で悠久を

大葉景華

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

同胞殺しの罪で円卓の騎士の座を追われた主人公はお気に入りのおダーツバーで毎日飲んできていた。

そんな中かつての同胞のトリスタンが現れ王の勅命を携えて来る。

お互いを嫌いながら共闘し、王の勅命であるエリンの秘宝を求め主人公は捨てた名を再び背負う。

# 目次

第一話

—————

1

第二話

—————

6



## 第一話

「あの、それもう五杯目ですよ？」

もう五杯目らしいウイスキータンブラーの中の液体を呷る。　　そうしてダーツ版にダーツを適当に放った。

「おかわり、くれよ」

「大丈夫ですか？」

そう言いながら六杯目のウイスキーを注ぐ。　　しかし、俺の事をこの店で知らないとは、新人か？　　数か月来ないだけでだいぶ変わるもんだ。

そうして俺が六杯目のウイスキーを呷ったら勢いよくドアが開いた。

「アニキ！　　やつぱりここにいたんスね！　　ここんとこずつといなかったから遂に死んだのかと思つたツスよ」

「ヤサ。　　俺がそんなじよそこらのチンピラやヤクザに殺されるとでも思つてんのかよ」

ヤサは俺に断りもなく隣のストウールに腰を落として俺と同じウイスキーを注文する。　　そして一息に飲みほし……いや、飲み干そうとしてむせやがった。　　もったいな

「ゴホツゴホツ！ よくこんなきつい酒飲めますね」

「別に普通だ。 お前が弱すぎるんだよ。 で、何しに来たんだ？ 酒飲むために数か  
月探してたんじゃないんだろ？」

俺がそう言うのとヤサは思い出したように俺を指さす。

「そう！ アニキの事をまた円卓の奴らが探してららしいツスよ」

「円卓の連中が？ 誰だ？」

「噂ではトリスタンらしいツスよ」

ヤサに言われていけ好かない野郎の顔を思い出す。 基本正面から戦おうとしない  
奴だが、まだ話を通じる奴だ。

「あいつなら大丈夫だろ。 円卓の中でもまだマトモな部類だし、俺の方が強いし」  
最後に重要な事を付け加えてから七杯目を呷る。

「お前の方こそ、闇金の連中から殺されないように気をつけろよ」

「大丈夫ツス。 金借りるときはいつもアニキの名前で借りてるんで」

「よし分かった。 今すぐ殺してやる」

そう言いながらヤサの首根っこ抑え、財布を抜き取りマスターに投げる。

「また来るわ」

「ありがとうございます」

財布の中身を受け取り、空っぽになったそれを投げ返しながら優雅にお辞儀をするマスター。

お気に入りのチエスターコートを羽織り、ヤサも安物の革ジャンを羽織りながらついてくる。先週くらいから急に冷え込みが厳しくなってきたやがる。

「ヤサ、なんで俺が円卓の騎士に狙われてるかわかるか？」

ヤサはこう見えて情報屋で戦闘の腕はからつきしでいくら鍛えても俺と三合打ち合うことが出来ない。だが、本業の方の腕は確かで流石俺をこの街に戻ってきて最初に見つけるくらいは出来るのだろう。

人目の付かない裏路地にヤサが入り込む。俺もそれを追いながら質問する。

「それが……」

ヤサにしては歯切れが悪い。円卓の騎士の名前を出して来たくらいだからある程度裏の取れているはずだ。

「おい、どうしたんだよ？」

「……」

答えないヤサの肩を掴み、問い詰めようとしたとき、不意に周囲の空気が震えだした。咄嗟に横つ飛びすると、俺のいた所。ヤサの真後ろを衝撃が突き抜ける。

「……つち！ 外したか」

金色に染め上げた長髪。 レザーのジャケットにダメージ加工のスキニー。 エレキギターを背負った男がビルの屋上から見下ろしていた。

「ヤサ……」

「……すんません」

項垂れながら裏路地を駆け抜けていく。 追いかけて一発殴ろうかとも考えたがやめた。 どうせむかつきは晴れないしなによりこいつの相手をしなければならぬ。

「久しぶりですね。 探しましたよ。 隠れるのだけは上手いですね」

「久しぶりだな。 俺は会いたくなかったぜ」

円卓の騎士。 豎琴と悲しみの騎士、トリスタン。 見た目と言葉使いが致命的にミ

スマツチだ。

「俺になんか用かよ？ 俺は高いぜ？」

茶化すつもりで言ったが意外なことにトリスタンは首肯する。

「ええ、王があなたの力が必要としています」

「あいつが？ 冗談だろ？」

「私も冗談だと思いたいですよ。 しかし、王は決して冗談などおっしゃられないお方です。 ならばあなたが呼ばれたことは何か意味があるのでしよう」

しかし、とトリスタンはギターを構える。 俺も腰から折り畳みの特殊警棒を抜いて



構える。国から超法規的に武器の携帯を許されている円卓の騎士や、その部下どもならいざ知らず。善良な一般市民である俺が日頃持ち歩いているのは催涙スプレーとスタンガン。あとはこの警棒くらいの物だ。

「おい、お前の仕事は王からの仕事の依頼することだろ？　なら戦う必要はないんじゃないか？」

「はい、ですが私個人としてはあなたが嫌いなので」

理不尽が過ぎる。しょうがない、俺の輝かしい未来のためにもこいつをボコボコにするしかないさそうだ。

## 第二話

トリスタンの能力はなかなか強力だ。遠距離に特化しておりその攻撃力は鋼鉄すら容易に切断する。音を増幅、超圧縮して刃を生成し放つ奴の攻撃の対処は二つ。

武器破壊か、直接本人を叩くかだ。

しかし、あいつが今いるのはビルの屋上。そこまで高くはないから壁を駆け上るくらいは出来そうだが、そのあいつがのんびり待つてくれるとは思えない。

事実、ビルの上からギターの旋律を打ち込んでくる。それを紙一重でかわしながらあたりを見渡す。しかし、あるのは腐った生ごみが入っているだけのごみ箱しかない。俺の得物がもつとまともな物であればあいつの攻撃を受けながらビルを上る事も考えたんだが、あいにく今あるこの警棒だと受けきるどころか一撃で真つ二つになつて俺まで斬撃が届くだろう。

圧倒的優位な状況から戦いを始める。おおよそ誉れ高い騎士のすることとは思えない。が、それこそが今の円卓の連中だ。

しようがない。こいつ、トリスタンがそんな戦いをするなら、俺もそれ相応の戦い方をするでしょう。

俺はポケットの中の催涙スプレーを取り出し、思いつきりぶん投げた。トリスタン  
は咄嗟にそれに斬撃を放つ。当然それが当たるとは思っていない。しかし、缶を破壊  
する為に一瞬だけ俺への攻撃の手が止まった。その隙に路地を飛び出し、さっきの  
バーまで走る。トリスタンもそれに気づいて攻撃してくるが、ギリギリ射程距離の外  
らしい。

「いらつしゃ……おや」

マスターが俺を見て眉をひそめる。

「奥、空いてる？」

無言でバーカウンターの中に入れてくれ、その奥の倉庫のカギを渡してくれる。無  
言で礼を言い、倉庫に飛び込む。おそらくトリスタンは高所の有利を捨ててまでここ  
まで追ってはこないだろう。倉庫の壁に背中を預けズルズルとへたり込む。あの  
事件以降比較的平和に過ごしていたから運動不足だったのだろう。あの

「大丈夫かい？ 今度は誰に？」

マスターも倉庫に入ってくる。その眼には半分の心配と半分の好奇心が映る。

「ええ、ありがとうございます。円卓の騎士様がちよつとね」

円卓の名前を出したら、マスターの眉が少し吊り上がる。しかし、昔話をしている  
暇はない。俺は倉庫の一番奥の棚に隠してあるルーン文字が刻まれた石と一振りの

武骨な剣を取り出す。よし、と剣を握りながら口の中でつぶやく。

歴史に残る勇者の時代から受け継がれているのは太古の時代の魔術だ。今でも人の世のすぐ裏に魑魅魍魎が跋扈する暗い闇の世界が存在する。世界中様々な組織や国がこれらに対応していたがこの魔術（様々な呼ばれ方があるがその根源は大体同じだ）を使っていない組織はほぼいないだろう。この石に刻まれているルーン魔術も古代の魔術でこれを刻むだけでこの石はさっきの催涙スプレーや警棒なんかより遙かに怪異に対して有効になる。

剣を持ちながら俺が師匠から言われ続けた事を思い出す。満を持してトリスタンの下手糞な演奏をやめさせることが出来る。防御用のルーン石を構えながらドアを開けると、さっきと変わらないピルの屋上にトリスタンは立っていた。

「よう、クズのくせに健気に待っていたのか」

「あまり被害を拡大させないようにと、アグラヴェインから言いつかっているのだからっ！ ああ、あの堅物の言いそうなこった！」

悪態をつきながら周囲に目を配る。やはり何も無いがこれはもう癖だ。師匠がずっと教えてくれた事の一つがこれだ。常に戦いにおいて場を確認することが肝要である。俺の師匠は剣術の腕は対してだったがなぜか一本も取れなかった。最弱の剣士と言われ続けたが生涯無敗の円卓の騎士であった。

そんな男が俺の師匠なのだから俺がこいつごときに負けるはずがない。真正面に剣を構える。

「剣を持っただけで私と対等に戦えると思っただのですか？ 私の曲は鋼鉄すら切り裂きますよ」

「やってみろよ下手糞。後俺は親切だから教えといてやると剣お俺が持ったら確かに対等じゃねえな。俺の方がはるかに強い」

それ以上は話すことがない。どちらが先か俺が飛び出すと同時にトリスタンも音の斬撃を飛ばす。奴の演奏は三小節で終わった。

ビルの下へと走る俺を牽制するように放った斬撃を加速して避ける。

ビルを駆け上る俺に斬撃を連射するが、あらかじめ投げておいたルーン石がそれを防ぐ。

駆け上がりざまに奴の右腕に切りかかる、と見せかけて裏刃でギターの弦を切断する。この程度の攻防は接近戦の初歩中の初歩であるがそれゆえに大切な技術で効果も絶大だ。

そのまま後ろに回り込み、膝を横からローキックをかます。そしてバランスが崩れたところを肩でタックル気味に押し倒し、首筋に刃を当てる。戦闘が始まってここまです。俺は自分の手際の良さにわれながらうっとりした。

「分かったか？ お前は前衛でお前を守ってくれる存在がいなきやその程度だつて事だ」

俺にミスがあるとすればここでこいつを殺さなかつた事だ。俺が数か月ぶりにこの街に戻ってきてすぐに円卓の連中に居場所がバレた事。そして単純に俺が油断していて久々の圧勝にちよつとだけ酔いしれていたのだ。だからヤサが俺の後ろに回り込んでナイフを突きつけて来たのに気が付かなかつた。

「……ヤサ。 お前、何のつもりだ？ 今までの事を恩に着せるつもりはねえが……それでも俺はお前を可愛がつてきたつもりだぜ？」

こいつはそこいらのケチな情報屋とは違い、仁義と言うか、義理と言うか、とにかくそういうのを大切にしている奴で俺もそこが気に入って付き合ひが始まつたのだ。円卓の騎士が相手とはいえ、簡単に俺を売るとは思えない。

「アニキ……。 いえもうアニキとは呼べませんね。 兄上」

ヤサがナイフを引く。俺もトリスタンから剣を引いてやる。

「訳を話してくれるんだろうな」

「はい。 その前に改めて挨拶を」

そう言つてヤサがナイフを胸の前に構える。まるで騎士の構えだ。

「ヤサと言うのは仕事で使う家での名前です。 私は円卓の騎士の一人。 役職は『ガ

レス』を賜っています」

ヤサが円卓の騎士!? しかし……。円卓の騎士は全員武芸に秀でているはずだ。

ヤサに道場で訓練している時もこいつは実力を隠しているとは思えない弱さだった。

「私は諜報活動が主たる任務なので。戦闘は人並み程度でしかないのですよ」

なるほど、それならこいつの弱さも、情報屋としての腕にも納得だ。

「じゃあずっと俺は円卓に関しされていたって事か。負けたぜ」

それで、と剣を収めながら話を続ける。

「数カ月俺をストーカーして何の用だよ」

「実は……あなたに仕事の依頼です。あるものを集めていただきたいのです」

円卓の騎士が俺に持ち込んできた仕事の依頼はあるものを集める事。その秘宝を

めぐって俺の運命は再び回り始めた。